

# 書肆えん通信

No.6

2018・7・1

書肆えん

秋田市新屋松美町

5-6

祖父保坂銀蔵について……………保坂 英世 1

## 祖父保坂銀蔵について

保坂 英世

### 柳虹を捜す

昨年（平成25年）5月、大潟村において日本詩人クラブ秋田大会が開催された。秋田県現代詩人協会が協力するということで、私も若干関わった。その際配布された資料に日本詩人クラブが発会したときの名前があった。西條八十初代理事長、河井醉茗、川路柳虹、佐藤春夫等である。大会が終わってから、家には確か柳虹のものがあつたはずと捜してみた。

それは沢山の短冊の中にあつた。銀蔵の短冊が入っているのが祖父の時代のものに違いない。雑多になっているのでどういふ経緯かは分からない。父の出征記念らしきものもある。柳虹の短冊は3枚、静方と読め

る短冊が3枚。こちらは別格で出来がよく、他の短冊とは明らかに違う系統のようだ。

祖父のことについては、昭和58年12月22日の秋田魁新報に「秋田の詩人保坂銀蔵氏の回想」と題し竹内孝二郎氏の寄稿があるのでそれを引用してみる。

秋田魁新報文化欄に詩壇が設けられ詩作者が増え、よき指導者により優秀な詩人も選出されているこの時期、明治末期から大正時代に活躍した詩人保坂銀蔵氏を知る人も少なくなつた。

氏は大正十年九月東京市、竹中書店より詩集『青蛙は黙祷する』を出版している。

秋田県で中央から詩集を出版したのは氏が最初でなかろうかと思う。

同年魁新報は詩集の出版を伝え、青蛙は黙祷するの詩を紹介し、出版記念の写真を掲載している。「種蒔く人」第一巻第三号十二月号には一ページ広告で

紹介している。

保坂銀藏氏は明治二十年一月四日、南秋田郡飯島村字飯田（現秋田市）に生まれ、秋田中学（現秋田高校）卒業後上京、医学を学び、その間、川路柳虹らと「現代詩歌」に参加し、著名詩人との交際もあった。

帰秋後、秋田市土崎港肴町（現秋田市土崎港中央三丁目十の十三）に眼科医院開業、昭和二十二年四月四日死去、行年六十一歳であった。

青蛙は黙祷する（原文のまま）

庭の路の葉の上で

青蛙が黙祷する

青い法衣をきた円頂の行者が

蓮の台で瞑想に耽っているやう

大空の深碧は永遠を暗示し

地上の新緑は希望にもゆる夢を形造る

太陽は宇宙の真諦を指しながら

東より西へ

青い行者は金縁の両眼をすゑて

豊かな日光を浴びながら

黙祷をつづける

斯うして初夏の「時」が静かに流れる  
青嵐が時々路の葉を揺って

巖行に戯れる

蒼穹は青くなんにもない

だがお前のみつめる空なところに

わたしもひとみを据ゑてゐる

### 石工の歌

石工が墓場で石塔を刻んでゐる

コツコツと刻んでゐる

其響が散りか、つた桜の梢に消えてゆく

数多の精霊が自分の順番を待つてゐる

一つの精霊に石工の肉体のまんなかから

自分の順番を尋ねてゐるものがある――

### 御題目の甕

息がつまる程むせかえる私の感情

またしてもフワーリ浮いて出る

亡き妻の面影

たとしへなき切なさに

南無阿弥陀仏々々々々々々々々

御題目の甕の中に

二人の歴史をしぼし封じこめるが  
それでもどうして抜け出るものか

またしてもまたしてもフワリ浮いて出て  
私の胸の中をかきむしる。

さらに詩集『青蛙は黙祷する』には氏の書いた歌  
劇「義経再興」が収録されている。歌劇「義経再興」  
は全ページ一七七ページのうち八十ページを費やしている。  
この歌劇には曲もなく、世に出る機会もなく、私は  
この『青蛙は……』の詩集を手にとると、だれかによつ  
て世に出る機会はないものかと痛感するのである。

大正十二年五月、『青蛙は黙祷する』は竹中書店  
より再版されているが、この年三月十八日詩人生田  
春月が『ハマナス』同人の招きで来港、佐清旅館に  
一泊、翌日、詩人竹内瑛二郎氏の案内で保坂氏宅を  
訪ねている。

昭和五年五月、その生田春月が自死。同年八月に  
夫春月の旅の跡をしるので夫人の花世女史が来港、  
瑛二郎氏同伴で再び飯島の保坂氏宅を訪ね、春月の  
訪ねた様子をいろいろと奥さん（キエ、再婚）に尋  
ねている。奥さんは十二年来訪の春月のことをよく  
記憶していて、手まねを加えて話された。女性二人

の会話を笑顔で聴いている口髭八の字の保坂氏の元  
気な容姿が目につかぶようである。この二人の女性  
も故人になってしまった。私の発行した「秋田文芸」  
（昭和七年一月創刊より二十号）には、保坂氏は八  
編の詩を発表しているが、今回は省略する。

今年は三十七回忌：回想はつきない。

（引用者注）傍点部分は誤りである。正しくは土崎港  
肴町とツエ

昭和22年といえ、私は2歳なので祖父の記憶はな  
い。ただ家には医療器具などが残っており、小さいと  
きは義眼とビー玉をころがして遊んだものだった。今、  
詩をやっているのも、どこかで祖父を意識しているか  
らなのかもしれない。

（初出は「日本海詩人」第3次42号）

高校青春史『伝統は生きている』より

「伝統は生きている―秋田高校編―」として、昭和  
39年1月25日から80回にわたってサンケイ新聞に連載  
されたものを、平成9年11月、秋田県立秋田高等学校  
同窓有志が復刻した。引用は、この連載の第21回から。

単行本としては、昭和40年2月、サンケイ新聞社秋田支局編で明昭会から刊行されている。

両教授の夜襲、ストライキ、舎監長征伐事件で退学をくった生徒たちは、だいたい東京に出て、私立の早稲田中学校などへ補欠として入学した。そしてあちらで「退校会」を結成。いわばケンカ相手である校長の添田をその会長に迎えたというから、明治の生徒は偉大である。しかもその師弟関係もいつまでも、うるわしくつづいた。

◇ ◇

当時三年生のくせに寄宿舎でも評判の豪傑がいた。夜になると、遠い便所に行くのを省略したりして、二階の寝室から階下へシャワーとやり、そのまま寢床にもぐる。またある夜など、一年先輩の四年生と組んで、同室の最長級生、のちに土崎で眼科を開業した保坂銀蔵（飯島）にいたずらのかぎりをつくしたことがある。

保坂は、勉強家でいつも階下の自習室から、一番遅く二階の寝室に上がってくる。いたずら気が多いその三年生は夏になると始末におえないノミの繁殖に悪計？を思い浮かべた。そうときめたら実行力の

早い三年生はくだんの四年生の協力をえて室内のノミ取りをはじめた。数日をへて、約五十ぴきのノミがとれた。それを封筒に入れて密封した。それでいたずらの準備はOK！

保坂の帰る足音で、すばやくかれのふとんのなかへ、ノミの大群を放った。すでに消灯後のことであり、保坂にはそんなたくらみのあることを知るわけがない。いつものようにすっぽりと床の人となった。三十秒ぐらいするとポリポリ、体中をかきはじめた。なにしろ血に飢えているノミの大群に襲われたのだからたいへんである。保坂はしきりに寝返りを打った。タヌキ寝入りの二人は笑うに笑えず、舌をかんでこらえていた。

「おかしい。ノミの習性として、一番最初に寝込んだやつが、もっとも被害を受けるはずだが、きょうは逆だ」

しきりに保坂は小首をかしげていたが、そのうちついに悲鳴をあげてしまった。

この三年生は、ふだん破帽をかぶり、ひきずるようなハカマをはいていた。のちの衆議院議員、男鹿市長の中川重春で、南寮七号室のエピソードである。（以下略）